

中国北京における都市空間の構成原理と近代の変容過程 に関する研究（2）

陣内 秀信

キーワード：1) 北京, 2) 近代化, 3) 近代建築, 4) 街区, 5) 敷地割り, 6) 跡地, 7) 建築類型, 8) 四合院,
9) 中庭, 10) 店舗

1. はじめに

1.1 研究の目的

本研究は、中国の北京を対象に、20世紀初頭から開始される近代化の過程で都市空間がいかに変容したかを明らかにすることを目的としている。長い歴史の中で都市形成の様々な層を重ね、しっかりとした空間の構造を築き上げてきた北京が、どのようなメカニズムで近代化を遂げたのかを、建築・敷地・街区・地区、そして都市全体のそれぞれのレベルに着目しながら、分析・考察するものである。

中国を統一する封建王朝である清の崩壊（1911年）による政治体制の変化は、都市全体の空間的ヒエラルキーや都市機能の配置を大きく変えた。また、交通網など近代のインフラストラクチャーが形成され、西洋風の建築が次々に建設された。このような状況の中で、近代を担う要素として特徴ある地区がいくつも登場した。政治中枢としての官庁街や外国公使館地区、西洋文化の流入とともに生まれた新タイプの住宅地、そして近代の文化を発信する繁華街などがいかに形成されたかを明らかにする。同時に、伝統的な住宅地や商業地がいかに変容を遂げたかも考察する。

ここでの成果は、北京が前近代に加え、近代に蓄積した建築と都市空間のストックの在り方を明示するとともに、今後の都市づくりにおける保存、開発の問題を考える上でも重要な示唆を与えるものと確信する。

1.2 研究の方法

清代までの前近代に築き上げられた北京の空間構造（建築から都市全体まで）の上に、近代化がいかに展開したかという視点に立って分析を行った。それによって北京固有の近代化のメカニズムを解明できるはずである。その目的にとって、『乾隆京城全図』（1750年）、近代の地図（『1927年北京図』）及び現況図（1/2000, 1978年測）の相互の比較が極めて有効な方法となった。さらに、文献史料をも活用しながら、都市全体と地区ごとの近代化の過程を把握し、面的な大改造よりも、むしろ清代までに形成された都市の基本骨格を受け継ぎながら、部分ごとの機能・意味の転換によって、北京の近代化が推進さ

れたことを確認した。その上で、特徴ある機能を持った意味のある地区をいくつか選び、現地で実測・聞き取り調査を行って、近代化の実態を細部から解明した。このような作業を通じて、北京の都市空間における近代化の特質を包括的に描き出した。

2. 近代北京の都市形成

2.1 歴史的背景

中国は1840年の阿片戦争後、長く続いた封建社会から次第に半封建・半植民地社会へと移行していった。その中で、上海、天津など帝国主義が制圧した港と租界地はかなり早くから発展した。一方、北京では、1858年の〈天津条約〉と1860年の〈北京条約〉によって、各国の公使館が北京につくられはじめた。以後、西洋諸国の近代文明を積極的に取り入れようとする〈洋務運動〉などにより、西洋の近代的な工業、鉄道輸送、銀行、商社、並びに商業、娯楽の施設が次々と北京に入り、歴史的な都市構造と景観に部分的な変化をもたらした。その後の辛亥革命（1911年）により、王朝体制が覆され共和体制が樹立した後は、多くの皇家のための場所が相次いで開放され、市内交通にも大きな変化が生じ、都市の近代化の条件を提供することとなった。しかし、1928年に国民政府が南京に遷都したため、北京は古都として文化の中心となる一方、都市の近代化は遅れ、従来の都市構造や敷地割りなどに、大きな変化は生じなかった。北京の近代化は、都市全体では一部の地区に見られただけで、依然として従来の都市の景観を保持していた。

2.2 都市構造の変化（図2-1）

元、明、清代を経て形成された北京の中心に位置する皇城は、辛亥革命の成功によって清の皇帝が退位したため、中南海を民国成立後すぐに総統府として用いたほかは、市民に開放された。天安門前の東西の千歩廊は取り除かれ、大きな道路を開通し、市民の通行ができるようになった。1913年には、紫禁城の文華殿と武英殿が開放され、1915年には紫禁城の前朝部分である太和殿、中和殿、保和殿が博物館として一般に開放された。1925年までに、最後の皇帝である愛新覚羅・溥儀が紫禁城から追

放され、宮城全体が一般に開放されて故宮博物院となった。これらは、都市機能の変化であり、都市景観に影響を及ぼすものではなかった。

北京におけるインフラストラクチャーの整備は、今世紀初頭から開始された。鉄道は1896年に京漢（口）線、1898年に京奉（天）線、1900年に京通（州）線、1909年に京張（家口）線、そして1915年に環状線が、一部の城壁を壊して通された。これにより、前門（正陽門）の南側に二つの駅が建設され、東を京奉線（後に津浦線も通された）の駅、西を京漢線の駅とし、西直門の外には京張線の駅がつくられた。また、1910年代には水道、電気などが供給され、1920年代以降には市街電車などの市内交通が徐々に整備され、北京の都市構造に少なからず新しい変化をもたらし、都市の近代化の基礎を築くことになった。

このような都市基盤が整備されたことも一つの要因となって、近代には幾つかの特徴的な地区が登場した。その中でも重要な地区として、東交民巷を中心とした公使館地区、王府井に代表される近代の商業地、前門外大柵欄に代表される中国式と西洋式の折衷からなる従来からの商業地、外城の一角に新規に開発された地区、教会を主とした小規模な地区などが挙げられる。

東交民巷一帯には近代建築が集中したため、きわめて重要な地区として位置付けられる。ここは、1901年の<辛丑条約>により公使館地区として区画されたため、イギリス、フランス、アメリカ、ロシア、ドイツ、日本

などの9か国が相次いで公使館を設立した。その周囲には、各国の練兵場をつくり、北の長安街、南の城壁、東の崇文門内大街、西の兵部街に至る地区を「使館保衛界」とした。この地区には、各国の公使館以外に病院、銀行、商社、ホテル、倶楽部等があった。

各国の施設が集まり賑わいを見せた、東交民巷地区に隣接する崇文門内大街、王府井大街は商業地として相次いで繁栄しはじめた。特に、王府井大街には主に外国人の勤務する外国商社が多く、銀行もまた支店や事務所を設立した。北端にあった東安市場は、購買、飲食、文化、娯楽が一体となり、多くの国内外の旅客を引き寄せ、王府井を繁栄させ続けた。また、南端の西側には、1903年に長安街に沿って北京飯店が竣工し、1917年にその西側に隣接して建てられた新館は、当時の北京では最も高層で、最高の設備を備えたホテルであった。

近代に形成された商業地がある一方で、廊房・大柵欄を中心とした前門外商業地区は、明清時代以降、元代の什刹海周辺に代わる中心的な商業地であった。前門は内城と外城の接点に当たり、交通が便利であったため、ここには有名な老舗が集まったばかりでなく、近代には劇場や映画館もつくられた。この周辺には数多くの旅館、レストラン、娯楽場、遊廓（八大胡同）などが開設されていた。

これらの特徴的な地区が登場した中で、近代以前の北京に多く存在していた皇家関係の用地では、用途の転用が行われた。王府は学校、役所などに代わり、壇廟などの祭祀施設は博物館公園として開放された。このような用途の変化は、敷地内部の構成や景観に大きな変化をもたらした。

このように、歴史的な都市である北京の近代化は、近代以前から形成された都市骨格が非常に整然としており、規模も広大であったため、都市全体の中で部分的に行われたにすぎず、基本的に整然とした都市構造と景観を保持していた。そのため、北京の近代建築は多いとはいえないが、歴史の上で一定の位置を占めており、重要な歴史的かつ文化的な遺産である。

3. 都市近代化の原理

北京は、元の大都に形成された都市骨格を基本的に継承してきたが、近代になると新たな都市機能を受け入れるために、既存の街区、敷地割りといった都市組織の制約を受けながらもその中身を少しずつ変容させていった。ここでは北京全体において、近代化がどのように行われ、既存の都市組織をいかに変化させていったのかについて考察した。

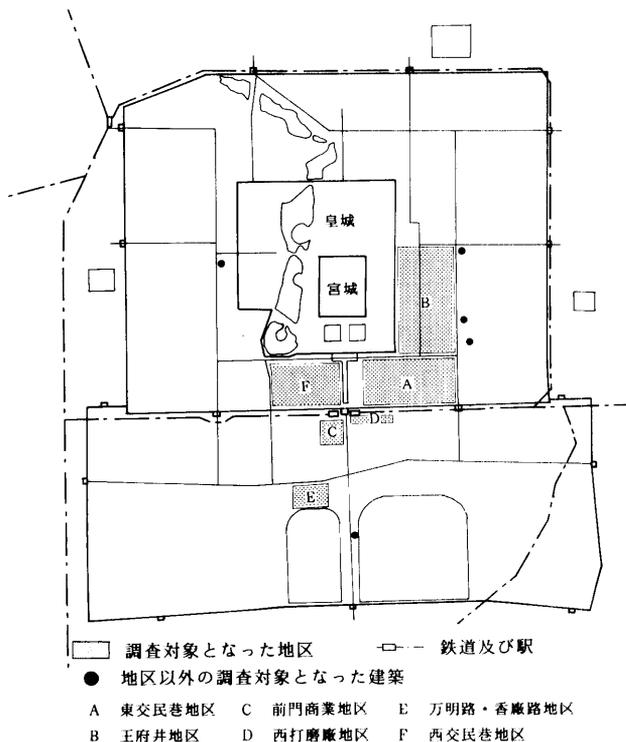


図2-1 調査対象となった地区及び建築

3.1 まち割りと開発のメカニズム

近代以前に形成された北京の都市骨格は、内城では基本的に東西、南北の道路網からなる格子状のまち割りで区画され、外城では複雑に道路が入り組んだ不規則なまち割りで構成されている。内城に着目すると、街区は短冊状の敷地が東西に展開して構成されるため、その東西幅は敷地に影響を及ぼさないが、南北幅は敷地の奥行きに直接影響する。街区の南北幅は、一般的な四合院住宅が並ぶ街区ではほぼ70mであり、それが内城の多くの部分を占める。一方で、王府、役所、寺廟などの大規模な施設がある街区では、それらの規模に応じて街区の南北幅は大きくなる。このような街区では、全体を大規模な施設が占めることはまれで、大規模な施設を除いた部分には住宅地が形成される。しかし、一般的な四合院住宅をつくるには、敷地の奥行きが長すぎるため、路地が複雑に入り込む不規則な敷地割りが生じた(図3-1)。近代にこのような場所の多くでは、敷地の併合がおき、計画的な住宅地開発によって、土地の有効利用がなされた。小規模な住居ユニットを規則的に配置する里弄住宅の形式も見られた(図3-2)。また、大規模な敷地の跡地は、学校、役所、病院などに転用された。

各国の公使館が集まった東交民巷地区は、近代以前には紫禁城前面の重要な場所として規模の大きい役所が多く集まっていた場所で、まち割りも住宅地とは異なった構成をとっている。住宅地などでは普通、東西を貫く道路に面して敷地が東西に展開するが、ここには東西を貫く道路には小規模な敷地が並んだ東交民巷しかなく、その地区の北側に多く集まっていた役所では、南北の通りから胡同を引き込んでアプローチをとる不規則なまち割りを構成していた。近代には、大規模な敷地は公使館に

転用され、東交民巷には敷地を併合した小規模な公使館、銀行、商社などが形成された。

近代以前に内城では、商業地は、東西に細長い街区の南北道路に接した部分に発達する傾向を示した。細かく分割された敷地に、南北方向に店舗がぎっしり並ぶ構成をとっていた。近代以前の王府井地区は住宅地の性格を持ち、王府などの大規模な敷地が複雑に入り込むまち割りであったが、南北を貫く王府井大街沿いには小規模な敷地が形成され、すでに店舗も並んでいた。近代に入ると、この強い南北軸である王府井大街沿いに、華やかな商業地が発展した。一方で、伝統的な商業地、前門外の大柵欄・廊房を中心とした地区では、小規模な敷地で構成された従来からの都市組織が崩れることなく、それぞれの敷地の内部で近代化が展開した。

このように北京での近代化は、従来の都市組織に制約されながら展開したのであり、広い範囲をクリアランスしての大規模な開発というものは非常に起きにくかった。大規模な新規開発も、外城の天橋の西側の、『乾隆京城全図』では荒地だったところに、一部実現しただけである。この地区では、従来のまち割りとは全く異なった手法によって、街区が計画された。

3.2 敷地利用と建築類型

敷地はその規模によって、大規模な敷地、一般的な四合院住宅の敷地(住宅系)、狭小な敷地(店舗系)に分けることができる。また、近代に新しく開発された地区には、四合院住宅のような奥長の敷地形態をとらない敷地が登場した。

大規模な敷地には、併合された敷地、分割された敷地、跡地利用があり、住宅地開発が行われたり、大規模な施

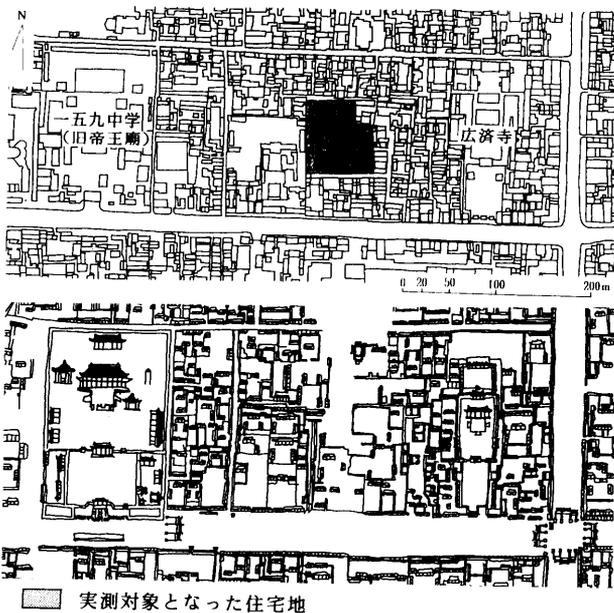


図3-1 阜成門大街北側一帯 現況図(1978年測;上)と『乾隆京城全図』(1750年;下)の比較

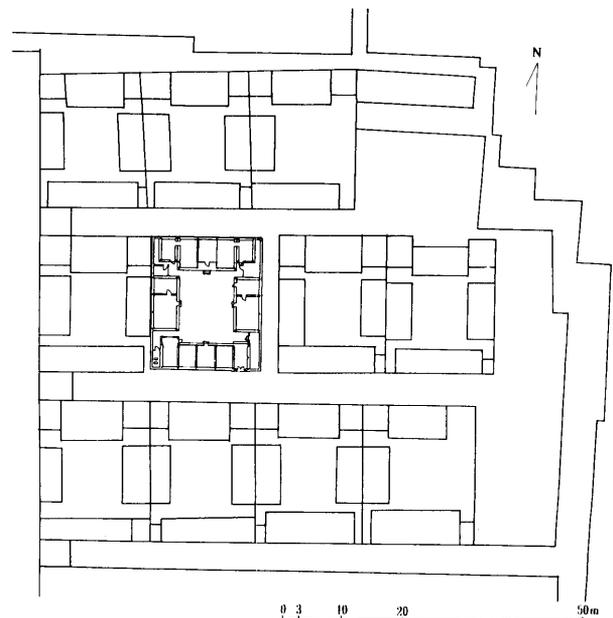


図3-2 四合院を応用した構成要素の関連

設がつくられた。住宅地開発は、併合^{ある}或いは分割された敷地に展開し、登場する場所によって様々な建築タイプを示す。内城西部には、四合院住宅の形態を忠実に守ったものが多く、敷地の高度利用という面からは決して効率的であるとはいえない。それに対して、内城東部には上海の花園里弄のようなものや、外国の建築様式によってつくられた協和医院付属住宅なども見られる。一方、外城では敷地の高度利用が重視され、棟を平行に並べる単純な形式がとられ、1戸当たりの居住面積は小さくなる。近代になってもなお、「貴西富東」（西は貴く、東は富む）と称されるような東西の性格の違いが継承されていたといえる。また、大規模な施設としては、役所、王府、寺廟などの跡地を利用した学校、役所などがあり、敷地を併合したのものには銀行、勸業場などがある。学校、役所などでは、四合院の王府などをそのまま利用するものもあるが、新しく建設されたものは西洋風のファサードを用いて高層化するため、より一層の象徴性を持った。

住宅の敷地をそのまま住宅として用いる場合、近代化はあまり起きず、依然として大部分が四合院住宅であったが、敷地内部で近代化が展開したものが幾つかあり、調査の対象とした。一方、銀行などに用途が変化したものは、四合院の倒座^{タオサエ}の敷地のみを利用するなど、興味ある様々な開発手法を示している。

敷地が狭小な商業地では、店舗においては売場面積拡大のため、より一層の敷地の高度利用が求められ、従来の中庭に屋根を架けてアトリウム化させ、敷地内を一つの空間として使う空間構成が登場した。また、同じ店舗

でも従来は高密度な商業地でなかった王府井地区では、改築などが容易に行われた。改築の手法にも様々あり、その中には敷地全体を改築し、西洋式の経営方式を取り入れたものも見られる。

従来の敷地に規制されて展開したものが多いのに対して、新規に開発された^{ワンミンルー}万明路・^{シヤンファンルー}香廠路を中心とする地区に登場した連続式店舗は、間口が長く、奥行きが短い敷地につくられた。このような間口を長くとする開発は、間口が狭く、奥行きが長い従来の敷地の中では起きにくく、街区の東西端の敷地を南北道路に面してつくられたものが、一部に見られるだけである。

このように北京では、従来からの都市骨格、都市組織に制約されながら近代化が起こったが、機能、用途などによって様々なバリエーションが展開した。ここでは、近代化の特徴の最もよく表れている公使館地区、住宅、商業地、多くの旅館が集まった地区、新規の大規模な開発の行われた地区を各論としてとり上げることとする。このほかに、金融街の西交民巷地区、教会を中心とした地区についての調査を行い、考察を進めている。

4. 近代を担った地区の各論

4.1 公使館地区（東交民巷）

東交民巷は近代において西洋的な建築の公使館が集中してつくられた地区である（図4-1）。

この地区では、前近代において王府や役所など大きな敷地を持つ施設が集中しており、近代にその跡地を利用して公使館が設けられた。

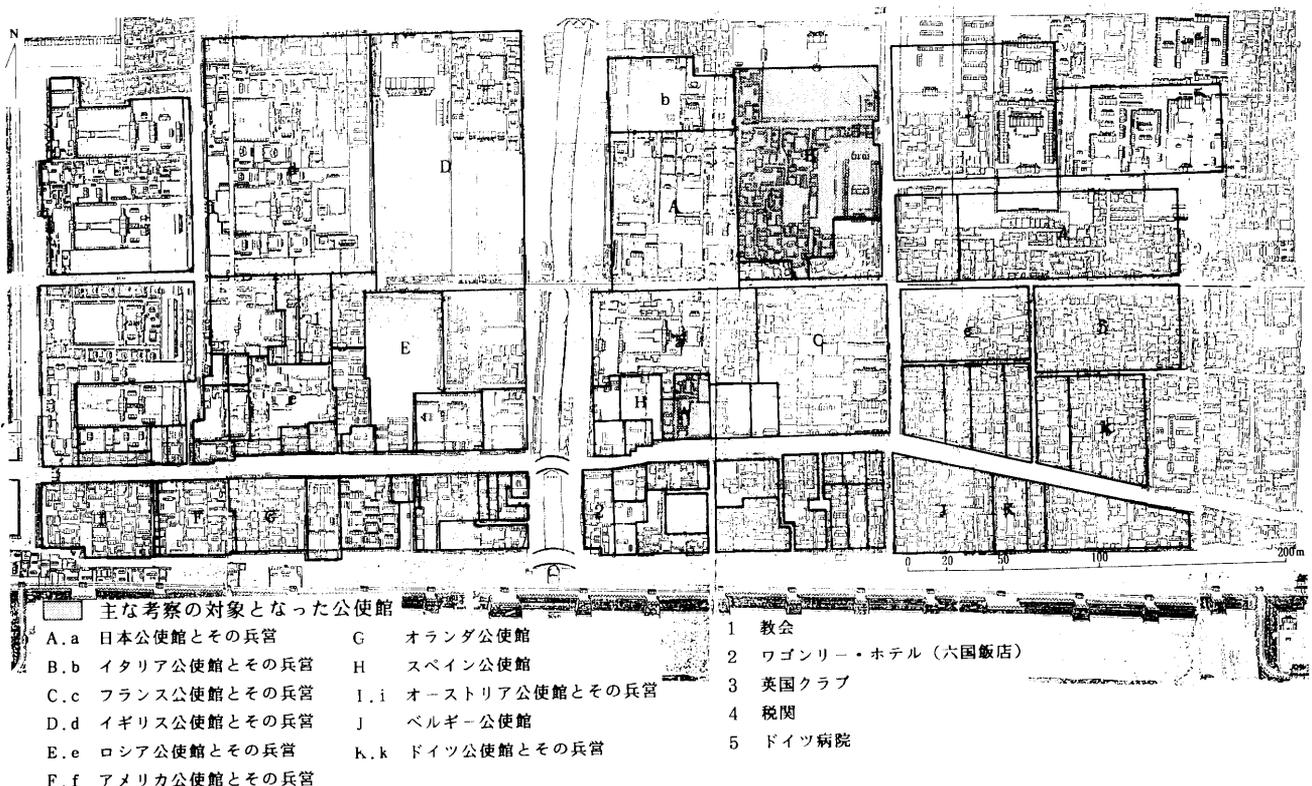


図4-1 東交民巷の全体図『乾隆京城全図』の上に1940年代の想定される敷地割りを重ねる

ここでは、京城全図と公使館の配置図の分析及び現地調査を行って、地区の構造、敷地との関わり及び空間構成の特質を明らかにした。

(1) 近代における公使館地区の形成

前近代の東交民巷には鴻臚寺など対外交流の重要な施設が設けられており、近代に公使館区が形成される歴史的条件を備えていた。そして、大きな敷地を持つ役所が集中していたため、大規模な公使館がつけられる基礎もできていた。

1900年以前、東交民巷ではいまだ寺や邸宅などが雑居しており、公使館の全体の占める面積も小さかったが、その一方で外国人のための生活を支える商店が多く現れ始めていた。義和団の乱を契機に公使館は従来のものから西洋風の新しい近代的な建築を建て替えられた。排水や電気など設備も充実し、従来の北京の建築とは異なり、構造体や壁面仕上げに石が多用された。

(2) 敷地の利用手法と空間構成の特徴

外国人が利用するこれらの建物の敷地選択には、三つの特徴がある。

1. 公使館及び軍隊駐屯地は大型施設なので大体広い敷地を持つ王府や役所の所に立地した。
2. 病院などのような中型施設はそれにあう敷地、例えば、寺や役所を利用した。
3. 銀行、ホテル、商社は交差点や道路側に面した民家を利用した。

また、各国公使館内部では、建物の配置の仕方によって、空間構成に次の三つのタイプがあった。

1. 一つの中庭を中心に四つの建物が周りを取り囲む四合院形式をそのまま利用したタイプ（日本公使館、図4-2）。
2. 四合院形式を一部だけを利用したタイプ（イギリ

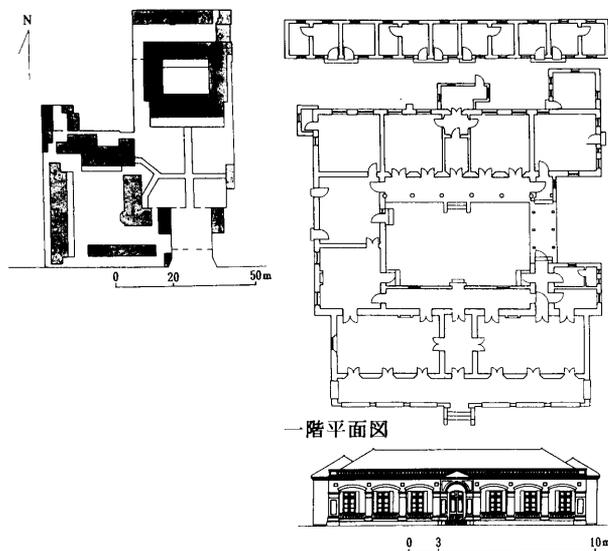


図4-2 日本公使館の配置図と平面図（平面図及び立面図の出典；王世仁他主編『中国近代建築総覧・北京編』中国建築工業出版社，1993から作図）

ス公使館，フランス公使館）。

3. 四合院形式とはまったく違った空間構成のタイプ（イタリア公使館）。

(3) 建築的特徴

これらの近代建築は西洋近代折衷主義に基づきながら、様々な様式を用いた。例えば、いらか段（corbie steps）が設けられたオランダ公使館やテューダー式のイギリス公使館などがある。しかし、公使館は細部の修飾などに従来の中国の建築手法も取り入れている。また、建築の外観だけでなく、内部の空間構成や家具の設置も西洋風のものであった。北京の四合院建築群の中にこのような全く違う雰囲気西洋的な近代建築群が現れることによって、東交民巷という地域の特徴がさらに明確化されたといえる。

上記のように、北京近代史の変遷の中で東交民巷は近代の都市空間と建築における象徴的な地位を占めている。

4.2 住宅地の系譜

北京では、近代においても四合院住宅が依然として大部分を占めていたが、西洋文化が流入し、また外国資本が導入されたことにより、一部には多様な住宅形式も生み出された。ここでは、実測及び聞き取り調査を行った26例の住宅を分析の対象とし、近代に登場した住宅及び住宅地の系譜を明らかにした。特に、敷地とそこにおける配置、住宅の空間構成の在り方に着目しながら、伝統からの拘束と新たな形式の創出の両面について考察した。

(1) 敷地の制約の中での西洋式独立住宅

独立住宅に見られる近代化は大きく二つのタイプに分類できる。第一のタイプは、四合院の配置形式を保持して部分的に西洋の様式を用いるものであり、大門、二門あるいは垂花門、正房といった象徴的な要素に部分的に西洋の造型が用いられ、正房が2層化する例も見られる。第二のタイプは、四合院の構成を取らずに西洋風の建物を独立して敷地内に配置するもので、その典型として金魚胡同121号の住宅がある。この西洋風の住宅は、近代における繁華な商業地、王府井大街より東に入った所に位置し、建設された当時は、政府官僚の住宅として利用されていた。短冊状の敷地が東西に展開する典型的な都市組織を示すこの街区は『乾隆京城全図』とほぼ重なり、現在まで敷地の変化がないことが分かる（図4-3）。その既存の敷地の上に、西洋風の住宅が登場した。奥長の敷地の南北からアプローチをとり、南側の道路には〈倒座〉が面している。しかし、中に入ると四合院とは全く異なる形式を示す。全て2階建てで、前面にバルコニーを持つ居住空間、その後方にサービス空間を置いて、両者をブリッジで繋ぐ斬新な構成をとる。そして、奥長の敷地を活用するために、奥に全く同じ形態のもう一つの住宅が同じ向きで建てられている。しかし、倒座と塀

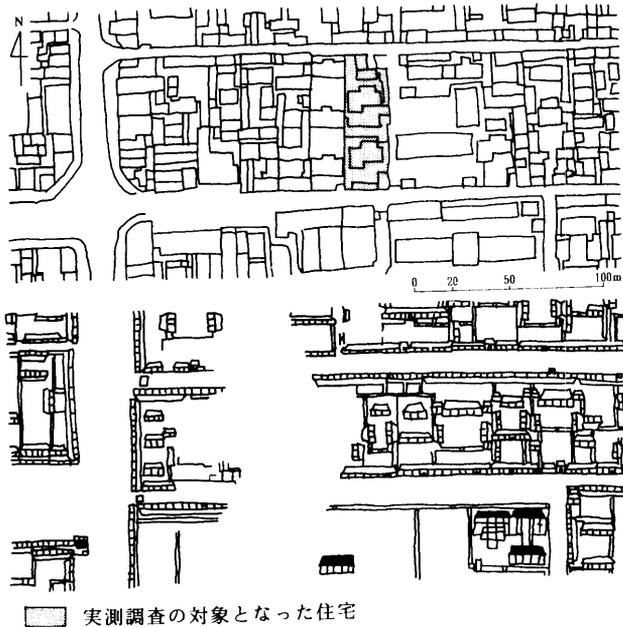


図4-3 金魚胡同 現在(上)と乾隆年間(下)の比較

で囲まれた敷地の内部で新しい形式の空間が展開しただけで、まちなみには影響を与えておらず、大門をくぐり、中庭があって主屋に至るという空間構成は変わっていない(図4-4)。

(2) 集合住宅及び近代の住宅地開発の手法

近代における住宅の特徴の一つは、同じような住戸を連続して並べ、或いは上下に重ねた集合住宅の形式を生んだことにある。しかも、それを広い敷地の中に数多く計画的に配する面的な住宅地開発もしばしば行われた。

近代に開発された住宅地は、城内全域にわたって分布し、どれも街区の中に自己完結的につくられ、周囲とは異なる独特の環境を見せている。開発の形式には、四合院住宅を変形させて集合させる形式(四合院形式)、多層化した連続住宅の形式、そして外国資本による海外の建築様式によるものの三つがある。

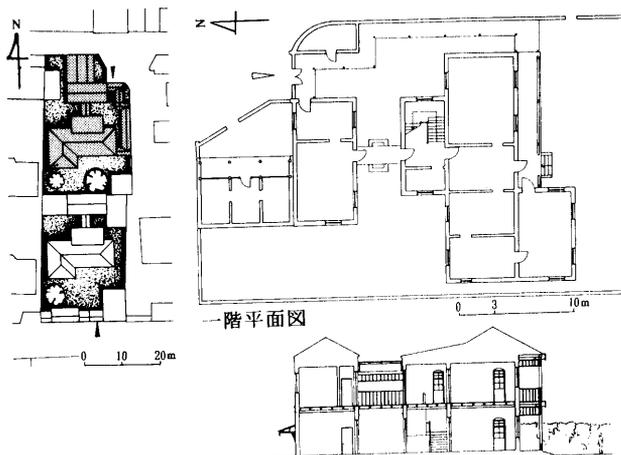


図4-4 金魚胡同121号

四合院形式は、四合院型、三合院型、行列型の三つに大きく分けることができ、さらに四合院型と三合院型には、片側一方の〈廂房〉が欠如したL字型、コ字型があり、行列型には、中庭式と前庭式がある。この全てのタイプを揃え計画的に形成された広大な住宅地「義達里」は、伝統的な商業地の一つである西四の南側に位置している。ここは、民国初年に中国人資本家の韓氏によって、朗貝勒王府を買収し開発され、1937年に竣工した。西側の店舗が並ぶ一角にアーチ型の門が設けられ、ここからアプローチする。中央の幅の広い道が東西を分断し、東西での配置、空間構成が異なっている。東側の区画は、南北の道から東に伸びる幅の狭い路地によって格子状に区画され、明確な軸線を持つ規模の異なる四合院型と三合院型の住戸から構成されている。西側の区画は、広場のような空き地を中心として住戸が配置され、各住戸は広場からアプローチを取っており、ここには中庭型、前庭型も見られる。聞き取りによれば、広場の北側に当時は、非常用の井戸が設けられており、中国人だけでなく外国人も住んでいたという(図4-5)。

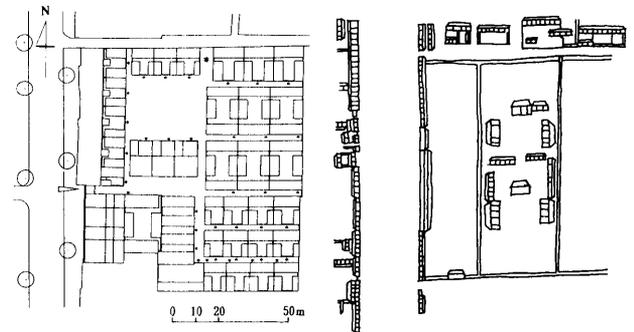


図4-5 義達里配置図 現在(左)と乾隆年間(右)の比較

多層化した連続住宅は、上海の花園里弄(ほうふつ)を彷彿とさせる。このタイプの典型として、王府井大街から路地を入ったところにある敦厚里がある。奥行きを長く、間口を狭くすることで敷地面積を節約し、対称的なプランを持つ2戸を一つのユニットとして東西に連続させるセミデタッチド式をとる。ベイウィンドウを持つ赤煉瓦造のモダンな住宅で、衛生設備が完備されている。南北に長い住戸ユニットは小さな前庭を持ち、内部はスキップフロアによって南側と北側に分かれている。南側は3層からなり、居室、便所、浴室といった居住空間として使われ、北側は2層からなり使用人室、厨房、倉庫といったサービス空間に当てられた。そして、この南北の間には、通風と採光のための小さい中庭がある。資産家が非常に多かったこの地ならではの展開といえる(図4-6)。

このようなセミデタッチド式を取るが、全く異なった配置を見せるのが、アメリカのロックフェラー財団が出資してつくられた協和医院の住宅である。併合された敷地は、煉瓦積みの高い塀で囲まれ、北京のまちなみとよ

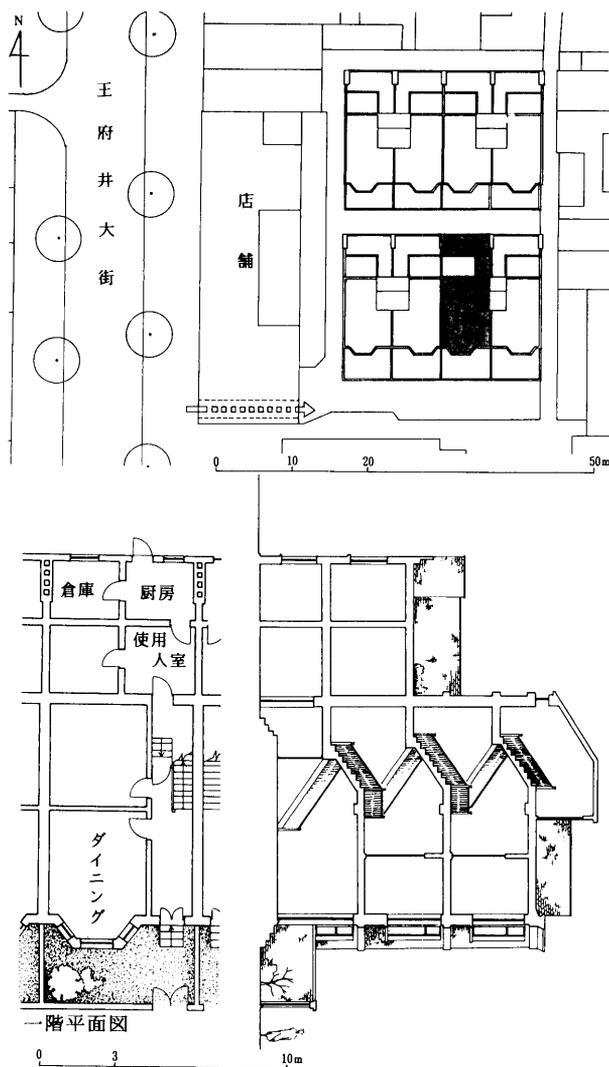


図4-6 敦厚里

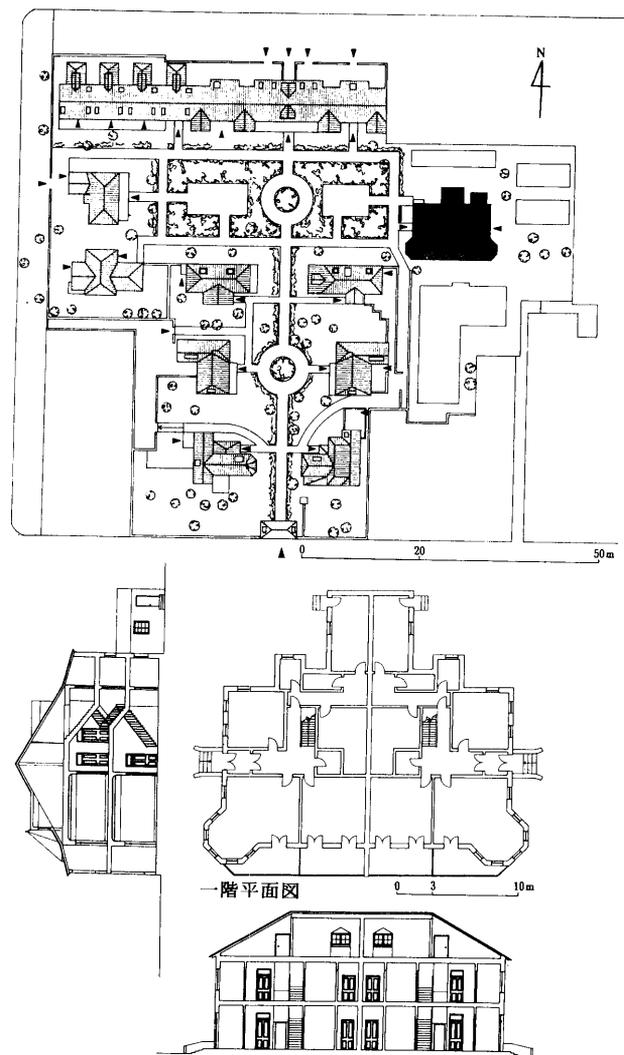


図4-7 協和医院北院住宅

く調和している。しかし、中国風の立派な大門をくぐると、内部には木々や芝生が生い茂り、2戸1棟のセミダブルタッチド式の住宅が植栽で区切られて配置されている。各住宅は、前庭を持ち、ベランダ、リビングルーム、使用人の居室などを備えた従来の住宅形式とは全く異なる構成をとる（図4-7）。

4.3 商業地の形成

近代になると、商業活動の規模が格段に大きくなり、商業建築に著しい変化が見られた。近代以前に、明確にゾーニングされてできていた商業地では、従来の店舗の敷地を有効利用し、高密度化させる傾向が見られ、新たに大規模店舗などもつくられた。一方で、近代の商業地として新規に形成される地区も出現した。ここでは、実測及び聞き取り調査を行った5例の店舗を主な対象として、現況図と『乾隆京城全図』、文献史料を補足的に用いて、新しく出現した商業施設の空間構成、及び従来の

店舗の変容について考察を行った。

(1) 新たに発展した商業地—王府井地区

この地区の中心である王府井大街には、総合的な市場や新しく西洋式の経営方式を取り入れた店舗などの新しい商業施設がつくられた。しかし、ほとんどが既存の敷地の中で新しい建築形式を用いてつくられた。その中で、大規模な商業施設の多くは、もともとの王府、寺廟などの大きな敷地を転用して生まれたことが『乾隆京城全図』から読み取れる（図4-8）。特に、普賢寺の跡地の一部につくられた東安市場は、総合的な市場の代表で、規模も大きく、様々な店舗が出店したために、北京の近代商業施設の中でも著名であった。ここには、常設・仮設の店舗のほか、劇場の吉祥茶園などの娯楽施設も多くつくられ、多くの機能を持つ市場であった。

王府井大街沿いの小規模な店舗は、外観の西洋化だけでなく、平面構成の上でも奥行き長い敷地を十分に利用している。改築の方法には、四合院の街路側のみを改

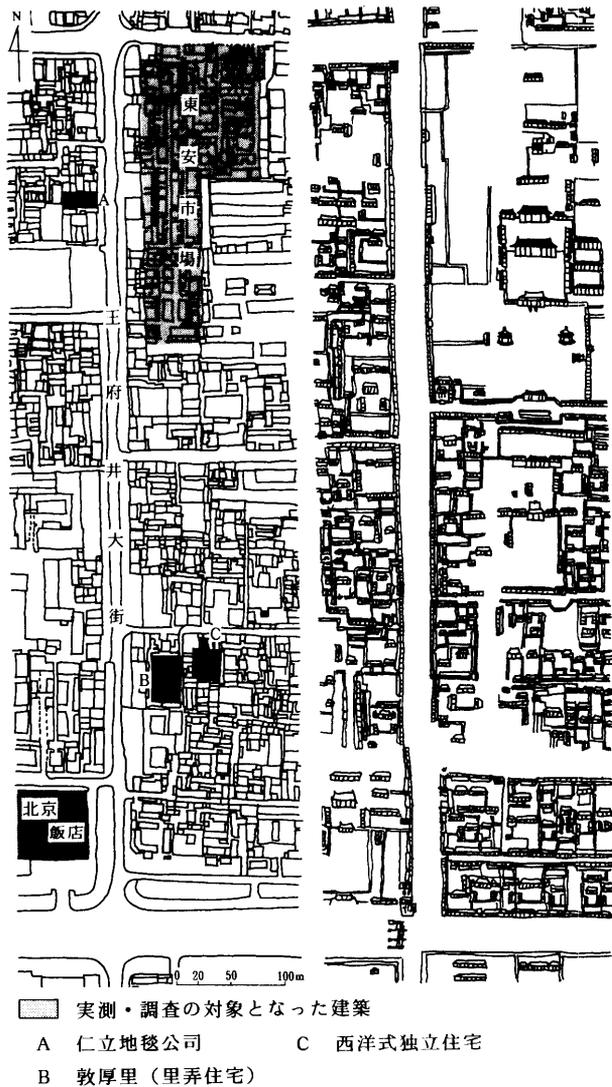


図4-8 王府井大街 現在(左)と乾隆年間(右)の比較

築するもの、敷地全体を改築するもの、従来の中庭を保持しながら改築するものという三つのタイプが見られる。

1932年に梁思成が設計した北京仁立地毯公司是、街路に面した部分を改築し、従来の中庭を保持しているタイプで、3階建の磚木構造でつくられている。平面構成では、1階の街路に面した部分にショウウィンドウが設けられ、その北側を店舗の入り口とし、南側を2、3階及び中庭につながるサービス通路への入り口となっている。それらに囲まれるようにして売り場があり、まるで四合院の中庭のようである。デザインには、ファサードの細部に見られる斗拱のように、室内にも中国の伝統的な様式が用いられている(図4-9)。

新たに発展した王府井大街では改築が多く行われたのに対して、近代以前から形成されていたこの地区の商業地、東四大街沿いでは、別の商店の後方空間を利用して、営業面積を拡大した店舗が見られた。この店舗は、聞き取りによれば建設当時、布店として利用されていた。街路に面しては幅5メートルほどの門が開かれているだけ

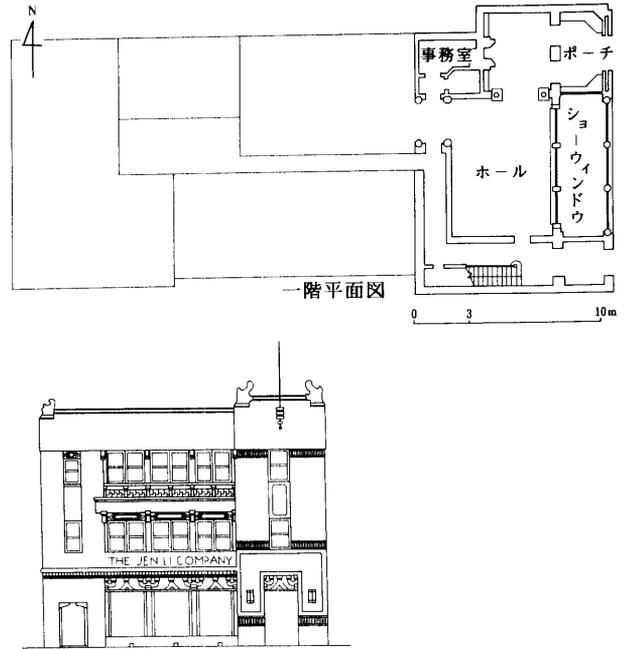


図4-9 北京仁立地毯公司(出典;王紹周主編『中国近代建築図録』上海科学技術出版社, 1989から作図)

であるが、そこから中へ入ると隣接した店舗の裏側の空間に、2層でつくられた西洋風の外観を持つ建物が出現する。ここを店舗として利用し、中庭を挟んだ奥をオフィスと経理室として使っていた(図4-10)。

(2) 従来の商業地の変化—大柵欄・廊房を中心とした地区

狭小な敷地に展開した従来の店舗の空間構成は、店舗部分の前房と中庭を挟んだ後房で構成され、前房では勾連塔と呼ばれる棟の連続させる形式が用いられてきた。近代になっても基本的にこの空間構成は変わらないが、販売方式の変化によって、敷地内部のより一層の有効利

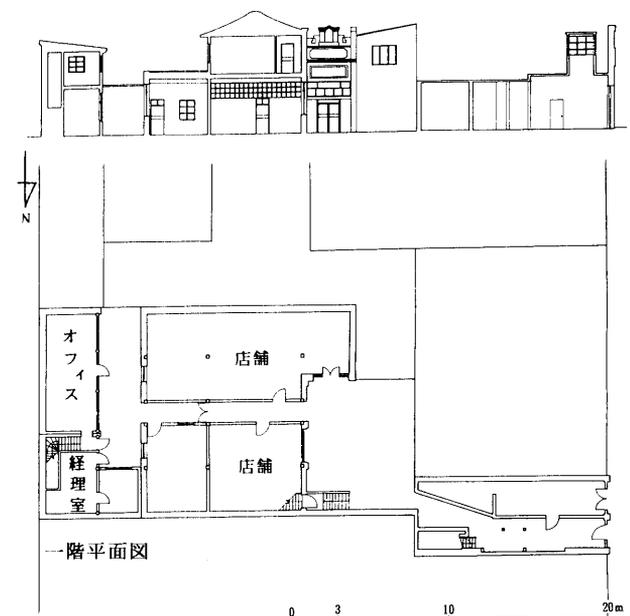


図4-10 東四大街沿いの布店

用が求められた。その方法としては、従来の店舗を2層化させることによって床面積を拡大し、もとの中庭の部分に屋根を架け、アトリウムとする方法が用いられた。そして、空間を仕切っていた壁が外され、柱が独立して立つことによって、敷地全体を商業空間として使うことを可能にした。職住一体が原則であった従来の店舗から居住の機能がなくなり、専用店舗へと移行していった。また、アトリウムに設けられた天窓から採光することで、奥に長い平面構成の日照と通気の問題を解決している。ファサードには、西洋式の柱が埋め込まれたり、鉄で花などの装飾が施されるなど、街路に向かう表の面1枚だけを西洋風に飾ることによって、まちなみのイメージを一新させた。

多くの近代化が既存の敷地の中で展開する中で、新しい大規模な商業施設である〈勸業場〉は、廊房頭条の狭い敷地を併合してつくられたことが、『乾隆京城全図』から分かる。街路から5メートルほどセットバックしたこの建物は、4階建の磚石構造で、ファサードや内部意匠の至るところに西洋の様式が用いられている。

4.4 旅館が集中する地区シーダー・モーターアンジエ—西打磨廠街

前門地区にある打磨廠街は、明清時代以来、交通が便利なため、商業が発展したが、鉄道駅が前門（正陽門）に建設されたことにより、旅館が数多く集中する独特の雰囲気を持った地区となった。特に、この地区に多く見られる旅館について、敷地と空間構成の関わりに着目し、その特徴を明らかにした。実測及び聞き取り調査を行っ

た旅館8件、小規模な金融機関2件、病院1件、北京式里弄1件、北京駅を主な分析の対象とし、考察を行った。

(1) 地区の構造

西打磨廠街には、商業、手工業の作業場、会館などが集まり、『乾隆京城全図』を見ると、この地区には、店舗のような小規模な敷地から、四合院の構成をとれる比較的大きな敷地までが混在していることが読み取れる（図4-11）。現況図と比較すると、一部大規模な銀行が敷地を併合して開発されたほかは、今日までこの構造が継承されていることがわかる。どのような規模の建築でも共通して敷地を建物で囲み、中庭を持つという手法はいぜんとして変わらない。

(2) 旅館の空間構成とその特徴

旅館の平面構成は、同時期に建てられた北京飯店などの西洋式ホテルと異なり、基本的に中庭式の四合院タイプを継承・発展させた建築形態をとっていることが注目される。中庭には、いずれも屋根がかかりアトリウム化している。客室が中央のアトリウム化した中庭を囲み、2層から3層でつくられ、天窓から採光を取る形式をとる。既存の敷地の幅に規定される中庭の形態は、四合院住宅の中庭に近い方形のものと同長の二つのタイプに分類できる。中庭を中心としたユニットを並べて構成されることもある。方形のタイプの典型には、シーフーイエンジエ西河沿街67号の大衆旅館があり、二つの中庭をからなる3層でつくられている。建物の中心軸に、二つの中庭を繋ぐ通路が設けられており、隅に階段室がある。また、隣接部分がサービス空間に、そして中庭部分が食堂になっており、厨

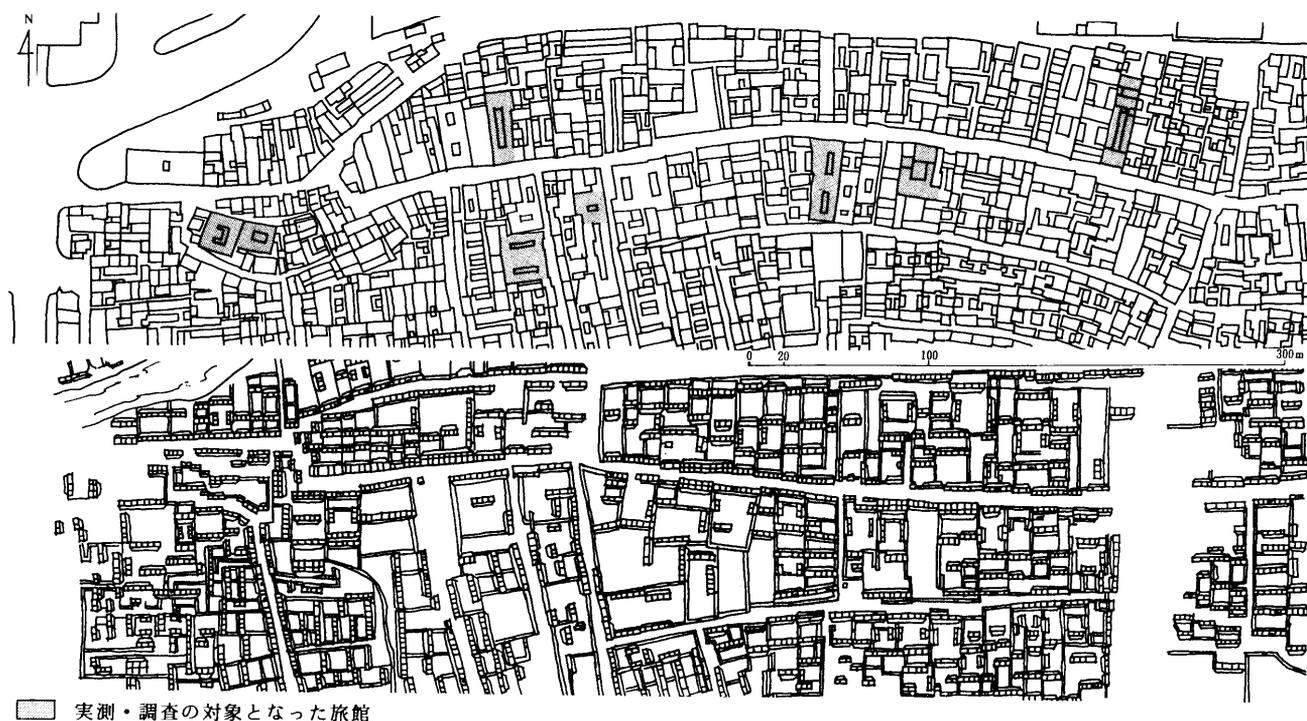


図4-11 西打磨廠街 現在（上）と乾隆年間（下）の比較

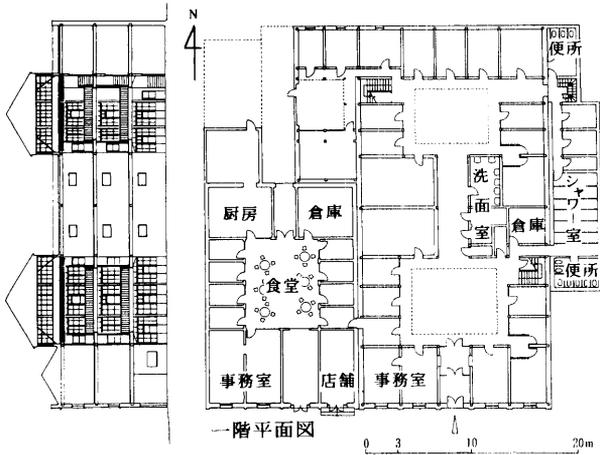


図4-12 大衆旅館-西河沿街67号

房が奥に配置されている(図4-12)。

一方、奥長のタイプには、西打磨廠街22号のかつて中国銀行の招待所として使われていた建物がある。奥長のアトリウム化した中庭を奥に連ねた平面を持ち、2層からなる。中庭に突出した階段が象徴的に配置されており、快適な中庭空間を演出している。外観には、化粧柱と水平のモールディングが壁面を幾つかに分割し、入り口にはアーチを用いるなど、西洋風の外観をとっている(図4-13)。このような奥長の中庭を間口方向に連ねる形態のものも見られた。

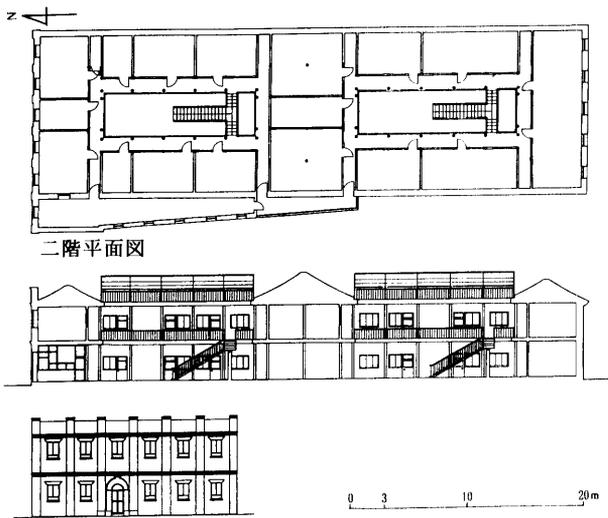


図4-13 西打磨廠街22号

4.5 新規に開発された地区-万明路・香廠路の周辺

北京における初めての大規模な新規開発が行われたこの地区の開発手法を明らかにし、新しい形態として登場した連続式店舗、妓院、住宅について、敷地との関わり及び配置・空間構成の特質を分析した。テナント式店舗2件、妓院2件、里弄住宅1件について実測及び聞き取り調査を行った。



図4-14 万明路・香廠路地区
現在(上)と乾隆年間(下)の比較

(1) 新たな開発の手法(図4-14)

娯楽街・天橋の西、先農壇の北にあるこの地区は、近代以前には、幾つかの寺廟と低級の妓院を除けば大部分は荒地であった。この地区の開発は国民政府が主導して行われ、1910年代に次々と道路が整備された。万明路と香廠路との交差点にロータリーがつくられ、東北角の街区には娯楽施設の〈新世界〉、西南角には病院が建てられ、近代を象徴する空間となった。短冊状の敷地が東西に展開する従来の都市組織とは異なり、万明路・香廠路に面した部分は通りに面して長く、奥行きが短い街区からなり、その裏は方形の街区によって構成された。各街区の角は、隅切りがなされている。街区の規模は変化に富んでおり、開発の際に様々なタイプの街区を試みたことが想像できる。万明路・香廠路に面した部分には、連続式店舗が建ち並び、その裏側には、高密度な里弄住宅や妓院がつけられた。

(2) 特徴的な建築の空間構成

2階建てで、ファサードの統一された連続式店舗は、壁と大門によって構成された従来の住宅地のまちなみとは全く異なる、賑わいのあるまちなみを構成した。香廠路にある連続式店舗は新世界の東側に登場し、当初は通り

に面して連続していたが、現在は西側の一部だけが残っている。西端は円弧状の隅切りが施され、象徴的な店舗の開口部が設けられている。西側の2間を除いて、3間が一つのユニットになっており、1階を店舗、2階を住宅とする構成をとり、従来の店舗と同様に、店と住まいが一体となっていた。外観には付け柱が設けられ、モールディングによって水平のコーニスのラインが強調されており、2階部分に張り出したバルコニーがこの建築にリズム感を与えている（図4-15）。

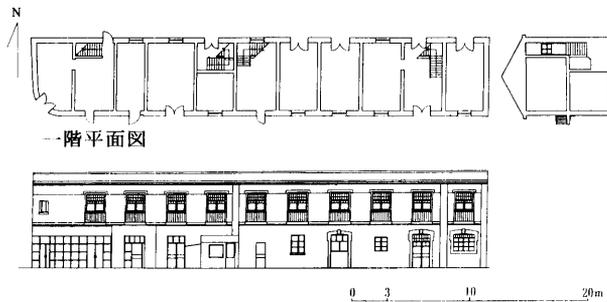


図4-15 連続式店舗—香廠路47号

4. まとめ

本研究によって、個々の建築のレベルから都市全体に至るまで、北京の都市空間が歴史的要素を下敷きにしなが、いかに近代化を遂げてきたかが明らかになった。住宅、商業建築、公共建築など、あらゆるジャンルの近代建築、施設が新たな質をもった都市空間との強い結びつきの中で成立している状況も描き出せた。本研究では、前近代と近代を繋げ、同時に建築と都市空間を切り離さずに理解する方法を提示できたと考える。

清華大学との共同研究の絆は一層強まり、大きな成果を生むことができた。

以下は、中国語による要約である。

关于中国北京的城市空间的构成原理和

近代的变迁过程的研究（2）

1、前言

1、1 研究的目的

本研究の目的在于究明中国北京在近代化过程中，城市构成空间的变化。北京在漫长的历史进程中，城市形成经历了层层变革，有了比较完整的城市空间结构。它是如何机理地完成了近代化的，对此，本文将着眼其建筑、建筑地块（基地）、街坊、地区及城市整体进行分析考察。

1、2 研究的方法

北京的空间结构（从个个建筑到城市整体）的近代化，是如何在清代的基础上发展起来的，本文将从这一观点出发，进行研究。由此，对《乾隆京城全图》（1750年）、近代地图（《1927年北京图》）及现状图（1:2000，1978年测）进行相互比较就成了极有效的方法。进而在活用历史文献，把握近代化过程的基础上，选择几个有特征功能意义的地区，进行现地实测、采访调查，弄清了近代化的实态。

2、近代北京的城市形成（图2-1）

1840年鸦片战争之后，中国从长期的封建社会逐渐变成半殖民地、半封建社会。各国公使馆在北京设立，西方的近代化工业、铁道、银行、洋行及商业、娱乐设施不断出现，城市景观逐步变化，但是，由于包括了迁都南京等原因，北京的近代化城市改造从城市整体来看，只限于一部分地区，过去的城市结构及建筑地区规划并无大的变化。

辛亥革命后，清朝皇帝退位，皇城大部分向市民开放。19世纪末，铁道开通，前门南侧建了两个车站。1920年代，市内电车开通。在这种市政建设的同时，近代出现了几个有特点的地区。例如，以东交民巷为中心的公使馆区、以王府井为代表的近代商业区、以前门大街为主的中式和西式折衷的传统的商业区、外城一角的新开发区、以教会为主的小规模地区等等。

3、城市近代化的原理

继承了近代以前形成的城市骨架的北京，尽管受到了历史传统的街坊，建筑规划这一城市组织的制约，其内容却不断顺应近代化的要求，发生着变化。

街坊的规模，建筑地块的发展给与了近代化开发某种方向性。形成旧市街的地块分为大地块、普通地块（住宅系）、小地块（店铺系），官府、王府、寺院等具

大规模面积的地方建立了官府、学校等近代大规模的设施，将店铺系合并，建立了银行、劝业场（图3-1，图3-2）。

此外，在地块面积规模比较小的商业地区，为扩大贩卖面积，进一步要求高度利用建筑面积，在天井加设屋顶，作为“内天井”，将建筑面积空间作为一个整体。

4、近代化地区的各论

4、1 公使馆地区 - 东交民巷

东交民巷是集中了外国公使馆建筑，象征了北京近代化的地区（图4-1）。在规模较大的王府与官府之地设立了公使馆和兵营，在寺院和小型的官府之地设立了医院等，在沿街的住宅之处，建立了银行、洋行、饭店等。

各国公使馆的布局中，有的结构上原样利用了四合院，有的部分利用了四合院，有的与四合院结构完全不同（图4-2，图4-3）。在外观与内部都采用了西洋近代样式，但在细部装饰上却使用了中国传统的建筑手法。

4、2 住宅地的系谱

在近代，四合院住宅占了主流，但随着西方文化及外国资本的流入，出现了多样的住宅形式。

也产生了同样住户排列、上下重叠的集中住宅形式（图4-4，图4-5），而且多次出现了将其大量地有计划地布局的有大规模建筑面积之处的住宅地开发。近代开发的住宅地分布在城内各地区。各住宅地均在街坊内自己完善，构成了与周围相异的环境。

首先受到注目的是“义达里”，它是将四合院型、三合院型、行列型住宅有计划地排列的大住宅地（图4-6）。其次，“敦厚里”（王府井大街东）的多层化连续住宅同上海的花园里弄相似（图4-7）。此外，美国洛克菲勒财团出资建筑的协和医院，以二户联立式建在树木草丛中，并配有阳台和起居室，呈西洋特点（图4-8）。

4、3 商业地的形成

进入近代后，商业规模扩大，商业建筑有了显著的变化。王府井大街建筑了综合市场和采用了西洋式店铺等商业设施，形成了代表北京的繁华街。从《乾隆京城全图》也可以看出，多数新商业设施并用了店铺后面的有大规模建筑面积的旧日的王府、寺院等（图4-9，图4-10）。

在外城的历史上较发达的大栅栏、廊房地区，在原建筑地块的基础上，通过两层化，扩大了用地面积在现有的天井架屋顶，使用了“内天井”手法。而且，临街的西洋式的建筑风格，使该地区面目一新（图4-12）。

4、4 旅馆集中地区 - 西打磨厂地区

该地区交通便利，自古商业发达。前门车站的设立，形成了旅馆集中的独特的地区（图4-13）。各旅馆基本上继承，发展了庭院式四合院方式，空间结构上，庭院四周为架屋顶的“内天井”，排列着客房（图4-14，图4-15）。

4、5 新开发地区 - 万明路、香厂路地区

在这二条街交界处，设立了“大转盘”，东北角设立了娱乐设施“新世界”，西南角建立了医院等设施，该地区成为象征近代的空间（图4-16）。各街坊交界处地段临街处店铺林立，其背后为高密度里弄住宅和妓院（图4-17，图4-18）。

总结

通过本研究，我们从个个建筑到城市整体的角度着手，弄清了具历史结构的北京城市的构成空间是如何实现近代化的这一课题，加强了同北京清华大学共同研究的交流，取得了很大的成果。

<研究組織>

主査	陣内 秀信	法政大学工学部	教授
委員	朱 自焯	北京清华大学建築学院	教授
	高村 雅彦	法政大学大学院	博士課程
	恩田 重直	法政大学大学院	修士課程
	袁 牧	北京清华大学建築学院	助手
	鐘 舸	北京清华大学建築学院	助手
	笠井 健	法政大学大学院	修士課程
	田村 広子	法政大学大学院	修士課程
	王 亜鈞	北京清华大学建築学院	修士課程
	黄 偉文	深圳市城市規劃設計研究院	設計士
	呂 絮飛	北京清华大学建築学院	修士課程
	高 柳	法政大学大学院	修士課程
	村松 伸	東京大学生産技術研究所	助手
	木津 雅代	KIDS 生活空間工房	プランナー
	稲葉 佳子	ジオ・プランニング	プランナー
	井上 直美	東京大学生産技術研究所	博士課程

調査・研究協力 鳥山 みゆき

図面作成協力

鈴木暁子・本田陽子・佐藤隆行・石濱綾子・佐藤和宏
(各員とも法政大学陣内研究室)